

**●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施し、何が困難であったのか**

建築の保存・再生の事業に実際に参加する問題解決型のフィールド実習をプログラムの中核とし、成績評価については、その成果を中心にまとめたものを評価することで行った。そのために、論文としてまとめたもの以外に、建築や集落の再生設計図面やビジュアルなプレゼンテーションも評価に含めることにしたが、その評価基準を明確化することに苦労した。特に博士前期課程では、すでに設置されていた特定課題コースを利用して、いわゆる修士設計を目指すプロセスを導入したが、その場合の設計評価と論文との関連の評価のために設けた基準をどこまで厳格化できるかが大きな課題となった。

苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

研究論文の評価と建築設計図面の評価では、評価基準が大きく異なることになる。前者が論理性や実証性に基づくものになるのに対し、後者は美的な評価や社会的貢献度やその可能性についても問われることになる。博士學位論文については、後者での評価の経験を積重ねた上で、それも含めて研究論文型式としたものを、あくまで学術論文として評価することにし、それは妥当な評価方法になりえたが、それまでの設計提案も含む評価の基準を作るのは難しく、調査と分析だけに優れたものと、設計の提案だけに優れたものをどのように評価するかが難しくなった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

とりわけ難しかったのが、実習の成果として提出させた建築設計に対する評価である。これについては、当初から担当教員だけではなく、事業に関わる多くの関係者による複数の観点からの評価をまとめるために、いわゆるオープンジュリーの方法を講じたが、それを重ねても、客観的な評価基準を厳密な形で構築することは難しかった。これについては、オランダなどの海外の同じ分野での教育方法などの情報を積極的に集めたが、さらに広範な情報収集と、保存・再生学のさらなる深化を進める必要があることが確認されている。

**●京都工芸繊維大学 工芸科学研究科造形工学専攻、造形科学専攻
「建築リソースマネジメントの人材育成」の事例 <理工農系>****具体的に何を実施し、何が困難であったのか**

建築の保存・再生の事業に実際に参加する問題解決型のフィールド実習をプログラムの中核としたが、その教育効果を検証するために、学生が実習をしながら自由に書き込める Web のシステムを構築し、さらに学生が提出する報告書に、実習で身に付けた知識・技能を書き込む欄を設けた。その書き込みにより、実習の課題を再編していくことができたが、一方で参加する保存・再生の事業は、こちらが想定する内容のものが常に存在するわけではないため、必ずしも検証にもとづく理想的な実習再編が実現されたとは言えない状況となった。

苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

学生が課題解決型の実習として参加する保存・再生の事業については、あらかじめ担当する教員とその協力者によって洗い出し選定していた。しかし、学生の対応や意見などによりその課題内容を再編する必要が生じたが、すぐにはそのための代替となる事業が見つからない場合も少なからずあった。また、実際に動いている事業のため、計画どおりのスケジュールとはならず、実施計画期間に実習が修了できないことも生じた。こうしたことにより、想定されていた実習で身に付けるべき知識・技能で、不十分な部分も含まれることになった。それを埋めるための小規模な実習等を設定もしたが、十分な対応とはならない場合もあった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

学生が課題解決型の実習として参加できるような事業は、事業者の都合や不可抗力などによる計画どおりにならない場合も多く、こちらが想定する内容を含むものがすぐには見つからない場合もある。そのため、学生からは具体的に、技能や知識でここを学びたいという要請もあったが、それに十分に答えることができない場面もあった。こうしたことに対処するためには、準備期間を長くとり、代替事業などの用意など、緻密な実習計画をあらかじめ立てる必要があることが確認された。